2024年5月12日 礼拝メッセージ

聖書：エペソ人への手紙3章14節～4章6節

説教：キリストを住まわせてください

はじめに

パウロは二回目の伝道旅行でエペソにおよそ三年滞在したのですが、そのとき救われる者たちが起こされ、やがて教会が建てられ、その地域の中心的な働きをするほどにまで成長しました。しかしパウロを憎む者たちから追われエペソを去ることになり、やがてユダヤ人たちから訴えられ、ローマに送られ、囚人となって軟禁されてしまう。パウロ逮捕の知らせはエペソの教会にも伝えられ、人々は心配し、悲しむことになる。そこでパウロは彼らを励ますためにこの手紙を書くことになりました。今日の所でパウロは、自分のことを心配してくれている教会のために祈っています。「あなたがたの心のうちにキリストを住まわせてくださいますように。」いったいキリストを住まわすとはどのようなことなのか。ともに考えてまいります。

１　一つになる

１）「家族」という呼び名の元

まず13、14節。「こういうわけで、私は膝をかがめて、天と地にあるすべての家族の、「家族」という呼び名の元である御父の前に祈ります。」

「家族」という呼び名の元である御父、どうしてこのようなことを祈るのか。簡単に言えば、発音が似ているのです。それでパウロは、語呂合わせや駄じゃれを言ったのか。そんなはずはなくて、「天と地にあるすべての家族」と言っているところがミソです。ユダヤ人は救われれても異邦人は救われない。そんな偏見がまだまだ支配的だった時代に、パウロは、３章６節でこう宣言した。「福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人も共同の相続人になり、ともに同じからだに連なって、ともに約束にあずかる者になります。」

ユダヤ人も異邦人も同じ家族である。いや地上の家族だけではない。天上の家族も皆一緒。みな一つである。なぜ一つになることができるのか。天の父なる神こそが家族の源だから。

２）コリント教会の問題

こう祈ったのは、パウロの頭には彼が開拓したもう一つの教会、コリント教会のことあったのかもしれません。コリント教会は、「私はパウロにつく」「「私はアポロに」「私はケファに」「私はキリストに」と言って、一つどころかばらばらになってしまった。エペソ教会は今は問題ないけれど、いつどうなるかわからない。そのことを心配していたのでしょう。これはエペソやコリント教会だけではない。どこの教会でも起こりうる課題です。そうならないためには、どうしたらよいのか。パウロは、一つの励ましと一つの勧めを語っています。

２　内なる人、あなたがたの心

１）内なる人：痛みと悲しみ

まず励まし。それが16節にあります。「どうか御父が、その栄光の豊かさにしたがって、内なる人に働く御霊により、力をもってあなたがたを強めてくださいますように。」

「内なる人」とはなにか。先週、私の知らない方からお電話がありました。そのことをお話ししたほうがわかりやすいでしょう。相手の方は名前を告げずにいきないこう質問をされたのです。「教会から離れることは罪でしょうか。」私は少々戸惑いながら尋ねました。「そうお考えになる理由が何かあったのですか。」そこで相手の方は、「実はこうで、ああで」と話を始めました。それを聞きながら、私は電話口の向こうでしゃべっている方はどんな方だろうと頭の中で考えを巡らしました。その方は、職業別電話帳を開いて、たまたま目に入ったのが中央教会だったので電話してきたそうです。そのような電話のかけ方は普通はしませんから、よほど切羽詰まっていたのでしょう。どんなふうに思い詰めているのか、話を聞きながら想像する。そのとき私がしていたことを振り返ると、人の外見や姿のような「外なる人」ではなく、その方の心の深いところにある痛みや悲しみを知ろうと、注意を集中していたように思います。「内なる人」と言うと難しく聞こえますが、ひとことで言えば痛みとか悲しみを抱えている場所のこと。そこが「内なる人」です。なぜ私はそこに注意を払おうとしたのか。ここに書いてあります。父なる神は御霊を通して内なる人に働いて強めてくださるから。それを信じるからです。弱い私たちを父なる神が御霊を通して強めてくださる。そのようにして、ばらばらになりがちな私たちを一つにしてくださる。これが励ましです。

２）心：罪が出てくるところ

次にパウロが語るのがお勧めです。17節前半。「信仰によって、あなたがたの心のうちにキリストを住まわせてくださいますように。」先ほど、「内なる人」は痛みや悲しみの感情に関わっている領域ですと言いました。では「心」のほうはどうか。どちらも似ているようですが、かなり違う。マタイの福音書15章18，19節を見るとよくわかります。「しかし、口から出るものは心から出て来ます。それが人を汚すのです。悪い考え、殺人、姦淫、淫らな行い、盗み、偽証、ののしりは、心から出て来るからです。」悪いものがどんどん出てくるところ、それが「心」です。まさに罪の巣窟です。いつも言いますが、これから暖かくなって女性の皆さんが半袖やスカート姿になり、肌を露出するようになると、男性の目はそういう所に無意識で向いてしまう。気がついた時には遅くて、すでに姦淫の罪を犯している。そういうことをしてしまうのが「心」です。

不幸にして教会が互いに対立してばらばらになりかけたら、どうしたらよいか。世の人たちは言います。「お互いに譲り合い妥協点を見つけましょう。」しかし聖書は違うことを言う。「信仰によって、あなたがたの心のうちにキリストを住まわせてくださいますように。」罪だらけの私たちの心のうちにキリストを住まわせることによって、初めて一つになれる。教会が立つか倒れるかは、この一点にかかっていると言ってよいかもしれません。

３　キリストを住まわせる

１）人知をはるかに超えた神

では、どうしたら心のうちにキリストを住まわすことができるのか。そこを教えてもらわなければ帰られない。そう思っていらっしゃるでしょう。19節にヒントがあります。「 人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができますように。そのようにして、神の満ちあふれる豊かさにまで、あなたがたが満たされますように。」

人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができるなら、あなたは心のうちにキリストを住まわせることができる。よく考えたらこれは矛盾です。人知をはるかに超えているのですから、私たちはどんなにがんばっても知ることはできないはず。それだけでない。人知を越えているものはもう一つある。20節。「どうか、私たちのうちに働く御力によって、私たちが願うところ、思うところのすべてをはるかに超えて行うことのできる方に。」相手は神ですから、私たちにかなうはずはありません。願うところ、思うところをすべて越えていく。もしこのままならば、神は遠い存在で終わりです。

２）十字架による和解

しかし2章26節にこうありました。「二つのものを一つのからだとして、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。」確かに罪を赦されないままでいるなら，父なる神も子なるキリストも私たちには手の届かない遠い存在でした。しかし、神は私たちのところ来てくださり、近い方となられ、罪という隔ての壁を壊してくださり、キリストによって大胆に、安心して近づくことができるようになりました。罪が赦されたことによって、もはや神は遠い方ではなくなりました。

ここで考えてみましょう。いま、罪赦されたと言いましたが、私たちが赦された罪はどれくらいの大きさでしょうか。（左右の手を広げて）これくらいですか。あるいはこれくらいですか。パウロは何と言っていますか。人知を越えていると言っています。私たちは「この程度」「あの程度」と言っていますが、とてもそんなものではない。神のひとり子がいのちを捨てなければならなかったほどです。それだけ大きな罪を犯していた。そんな私たちがキリストを心のうちに住まわせる。どうしたらよいのか。

３）「キリストを住まわせる」とは

皆さん、大切なお客さんを家に泊めるとしたらどうするでしょうか。ガレージに寝てくださいとは言いません。家の中で一番きれいなところ、昔なら奥座敷と呼ばれる部屋に泊まってもらいます。ではイエス・キリストはどこに住むのでしょう。心のうちにキリストを住まわせる。その心は罪だらけです。ということは、キリストは家の中で一番汚い部屋に泊まることになる。それも一泊二泊ではなく、ずっと住み続ける。ここで二つのことがわかる。一つは嬉しいこと。二つ目はちょっと困ったこと。

一つ目。嬉しいこと。簡単です。お客さんのためにきれいな部屋を無理して用意する必要はない。手間が省ける。掃除が苦手な人には実に嬉しい話。これが良い点。

二つ目。ちょっと困ったこと。キリストが一番汚い部屋に住んでくださる。想像しただけでも恥ずかしくなります。その部屋はほかの人に見せたくないので、できれば釘で扉を打ち付けて永遠に

「開かずの間」にしたいくらいです。なにしろひどいいやな匂いがするし、ネズミや気持ちの悪い虫が出してくるようなところです。そんなところへキリストが住むと言われる。考えただけでも憂鬱になる。

　そんなところでもキリストが住んでくださるというのですから、もっと前向きに考えてみたらどうでしょう。「イエスさま。私の自慢の一番汚い部屋をお見せします。どうかここでお休みください。」そうやって迎えてよい。たぶんイエスはこう言われるでしょう。「なかなか汚い部屋ですね。気に入りました。ところでここにあるゴミ袋には何が入っているのですか。あちらに大きなバッグが置いてありますが、開けなら何が出てきますか。おもしろそうなので見せてくれませんか。」こちらは「ああ、それだけは見て欲しくない」と思うのですが、次々と開けて見せることになる。そのたびに恥ずかしい思いをする。でもイエスは喜ぶ。「よくあなたの汚い罪を見せてくれましたね。」そこで私たちはだんだん気がつく。私の罪はこんなにたくさんあった。「あれくらい」「これくら」どころではなかった。そしてもう一つ分かる。キリストはこんなわたしをも愛して下さっていたということ。そんなふうにしてキリストと一緒に汚い部屋を掃除して片付けていく。やがて心が軽くなります。楽になっていく。キリストが私をきよめてくださる。そうやって一歩一歩天の御国に近づいていきます。そこにはもう争いはありません。神の家族として一つとなっていきます。

　エペソ教会のために祈ったパウロの祈り。それはそのまま私たちのための祈りでもあります。私たちの心に住んでくださるキリストとともにこの一週間も歩んでまいります。